

教職大学院

Newsletter

No. 35

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2011.10.21

教職大学院への熱い期待

福井大学理事（経営・大学改革担当）・事務局長
経済学Ph.D. 高梨桂治

若かりし頃、文部省に勤めていた時期がある。当時の中曽根首相の肝いりで「臨時教育審議会」（臨教審）の発足準備が始まり、関係部署は大変だと横目で眺めていたところ、何と発足と共に事務局に配属されてしまった。事務局の一番ペーパーの係員で、コピー取り、輪転機回し、ワープロ打ち、資料づくりといった単純作業を、睡眠不足と戦いながら日夜延々と続ける毎日を送った。組織のボトムにおり全体像を把握できる立場にはなかったが、臨教審での議論が進むにつれ、こと初中教育については、この方向で本当に教育改革ができるのかボンヤリ疑問が膨らんでいった。当時のボヤッとした思いを今の言葉で整理すると、次のようになる。当然のことだが、学校教育は、各教室で教員と児童・生徒の間で日々展開されている。従って、学校教育を「改革」するためには、教員が毎日学校現場で行っている教育・指導活動の質のたゆまぬ改善、改革が必要となる。これを全国規模で行うためには、現場でどのような教育が行われ、学校を取り巻く諸状況を含め、そこにはどのような強み・弱みがあり、課題があるのか、どうしたら各教室での教育の改善、改革を促進・継続できるのか、徹底的な現場での検証と学問的な実証が前提となる。臨教審委員には各界のそうそうたるメンバーが集ったが、とことん現場を実証的に吟味していくといった考え方や、現場からの生の情報に根ざし、今風（日経ビジネス風？）に言えば「現場力」をいかに高めるかといった視点は弱かったのではないかな。そこから導き出される政策提言にどれほどの実効性があるのか。

翻って、我が福井大学の教職大学院は、大学教員が

学校現場に入り込み、拠点校の院生以外の学校教員も巻き込み、日々の教育活動の質をいかに高めていくか、実践的な教育研究活動を展開していると理解する。これまで永田町、霞ヶ関で行われてきた教育改革論議で欠乏してきたと危惧される現場主義を是非貫徹いただきたい。大学院として、そこで得られる知見、経験を基に、学校現場での教育の継続的な向上に必要なシステムや諸要件等を体系的に取りまとめることができれば、これこそ今後の日本の学校教育改革のモデルの一つとなっていくのではないかな。そのためにも、学校現場での協働的な実践に加えて、様々な努力とアウトカムに関する実証的な調査研究もぜひ進めていただきたい。データや数字で表せる教育の成果はごく一部であろうが、データに基づく論証は（それが可能な場合）実証的な科学には必須であるし、narrativeな記述を補完し、モデルの有効性を説く強力なツールになるからである。

内容

- 教職大学院への熱い期待 (1)
- 夏の集中講座を終えて (2)
- 院生紹介(4)
- 拠点校・連携校だより (5)
- 学びを拡げる多様な活動 ～学会・視察報告～ (9)
- 平成23年度更新講習（必修領域）の実施状況報告 (17)
- 教師教育ネットワーク・交流のひろば (18)
- 書評 (19) 報道記事 (19)
- 拠点校研究会案内 (20)

夏の集中講座を終えて

7月の終わりから8月にかけて、3日間の集中講座が3サイクルにわたって開かれました。実践記録の綴られた書物や分厚い理論書との対話、そして各自の実践について様々な人たちとの対話を重ね、長い目で実践を捉え直し、新たな展望が拓けたのではないかと思います。参加者のメンバーに、集中講座を振り返って考えたことを紹介してもらいます。

スクールリーダー養成コース1年／啓新高等学校
東 俊輝

今年度から、福井大学教職大学院のスクールリーダー養成コースに入学させていただき、さまざまな立場の先生方と話をさせていただく機会を得たことで、自分自身たいへん刺激になることも多く、この夏まで充実した数ヶ月を過ごさせていただいてきました。その一方で、大学院に通わせていただきながら自分はいったい何を研究し、勤務校にどのような寄与ができるのかという不安が、「研究」というより考えるポイントがまるで具体化していないというところから出てきていました。それがこの夏期集中講座で合計9日間じっくり考える機会をいただけたことで、自分の向かうべき方向性、すぐにでも実践できるであろうこと、勤務校にも還元して役立てられそうなことなどを、いくつかは見出すことができ、今後の大学院における活動への気持ちに前向きな変化を得られました。

9日間の中では、自分のこれまでに歩みを振り返り、現在の教員としての姿に至ってきた道筋を考えなおしてみる時間も多く取ることができました。今大切にしようとしていることは、当然ながら過去の自分の体験の中から選び取ったことであるし、そのような環境の背景には多くの人たちとの関わりや援助があったということを確認し、今後に生かす糧となることを確認できました。

Cycle1,2においては、あらかじめ何点が提示されていた本からそれぞれ1冊ずつ選んで読み込みました。Cycle 1 では、浅川陽子著『ことばの生まれ育つ教

室』を読ませていただきました。様々な体験型の実践を通して、子どもたちが自然にことばを出す。話さずにはいられないというような授業が書かれていました。まさに、「自己の内面を搾り出させられる」授業であり、子どもたち自らが学びたい、知りたいと思って自発的に能動的に学習する場面が描かれていて非常に刺激になると同時に、自らの授業にもそういった仕掛けを増やしていかなければならないと感じることができました。Cycle2では、ウェンガーほか著『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読ませていただきました。組織の中におけるコミュニティについて細かく書かれており、私の勤務校である啓新高等学校の授業研究会での取り組みと重ね合わせながら読み進めることができました。その中で、コミュニティが存在すること自体の価値や、コミュニティのメンバーであることの価値などが述べられている部分が多くあり、本校に当てはめて考えてみるべきポイントとなりました。

私と同じグループになってくださった各校の先生方のお話をたくさん伺い、自分の読み込みの足りなさから捉えそこなっていた部分を教えていただくことができ、たいへんありがたく感じています。またコーディネータ担当の先生方には長時間にわたりご指導いただいたことも充実した9日間を過ごすことができた土台であり、感謝申し上げます。

スクールリーダー養成コース1年／福井県教育庁嶺南教育事務所
赤城 美紀

集中講座の1日は、午前9:30から午後5:00まで。たっぷり時間があるように思うが、分厚い実践記録や難解な理論書と格闘しているうちに、あっという間に1日が終わる。とにかく、「読んで」「立ち止まり思考して」「書いて」「語り合い聞き合う」ことを繰り返す。出口が見えず苦しいが、このような時間を与えられ、チャレンジできる環境に身を置かせていただい

ていることに感謝しつつ、必死に取り組んだ9日間であった。この集中講座を終え、たくさんのお会いや学びを得られたことに大きな充実感を感じている。

Cycle1では、富山市堀川小学校の実践記録『生き方が育つ授業』を読んだ。「生き方」が育つとは、「追求のシステム」が進化・成長すること、つまり「学び方」が育つということである。そして、それを見取る



ことができるのは「生き続け、生き抜く、そして生き方を深める」教師のみである。言い換えれば「学び続け、学び抜き、学びを深める教師」ということであろう。「生きる」ことは「学ぶ」ことであると教えられた。

Cycle2では、ウェンガーの『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読んだ。過去にこの書物にあたった先輩方から「とにかくすごい本」「超難解」「でもおもしろい」などと、噂には聞いていた。いよいよこの本を読む時が来たのだという、期待と不安で読み始めたが、読んでみるとすぐにその世界に引き込まれた。知識基盤社会における実践コミュニティの在り方について書かれており、最初から最後まで一字一句私にとって新しい「知」となるものであった。

Cycle3では、これまでの実践をレポートにまとめた。自分の過去を振り返り、文章化して省察することは、苦い思い出や反省すべきことなどが多く思い起こ

され、大変つらい作業であった。しかし、だからこそ、その意義を感じた。クロスセッションでは、グループのメンバーからの報告を聞いて、それぞれが悩みながらも真摯に現実と向き合い着実に実践を積み重ねておられることに感銘を受け、自分も前へ進まなくてはという思いを強くした。また、拙い私のレポートに対してもすべて受け止め、共感し、前向きな意見をいただいた。年齢、立場、経歴など全く違うメンバーが集まり、互いに悩みを共有し、思いに共感しながら語り聞き合うこのセッションでは、豊かな「学び合い」により自分が成長できることを実感した。

この夏の集中講座で、理論を学び実践を省察することにより、自分のやるべきことの方向性と意味づけをはっきりさせることができた。この学びを生かして、これから一步一步、あせらずに、でも着実に実践の種をまいていきたいと考えている。

教職専門性開発コース1年／美浜町美浜中学校インターン 角田 望

4月から美浜中学校でインターンシップをさせていただき、はや4ヶ月が過ぎた。私にとってこの4ヶ月は、とても濃く、有意義なものであったと思う。生徒たちと関わり、会議や現職教育にも参加させていただくことにより、教育実習のときは違った視点から学校を見ることができた。しかし授業実践では、「もっとこうすればよかった」と心残りなことばかりであった。はじめはうまくいっていると思い込んでいた実践であったが、その考えがラウンドテーブルで覆され、自分がどれだけ生徒のことを考えられていなかったのかを思い知った。それと同時に、これから自分の授業をどう変えていけばよいのか、自分に足りないものが何なのかを考えるきっかけとなった。

夏季集中講座Cycle1では伊那小学校や堀川小学校の実践記録を読み解いた。私は富山大学出身で、大学の授業で、堀川小学校に授業見学に行ったことが何度かあったが、その当時は自分のイメージしていたものとは違ったため、授業の意図がつかめず、失礼ながら「本当に授業なんだろうか」と疑問を持ってしまった。そんなこともあり、私はCycle1では堀川小学校の実践記録を読むことにした。この記録を読めば、堀川小学校の先生方の目指す授業、また自分に何が足りないのか分かるのではないかと考えたためである。

堀川小学校では、「勉強を教える」のではなく、「生き方を育てる」授業に取り組んでいる。児童は1人1人が教師の課題に対して何らかの問題を見つける。それを、他の児童との意見交換を通して自分の考えを深めていく。1人1人それまでの生活経験が違うため、個人で問題とするものが違う。したがって児童たちは様々な考えや意見を取り入れながら、常に学習意欲を持ち、授業に取り組んでいる。また、児童が話し合っ解決しようとする課程を教師は見守るだけで、あまり発言はしないようだ。教師には待つ姿勢が大切であるということが読み取れた。

この実践記録を読み、堀川小学校の先生方は、児童の気付きや意見交換、学び合う力を信じて児童主体の授業を作り上げているということが分かった。そして私に足りないものは生徒を信じる心だということに気がついた。私は「生徒にこれはできないだろう」と勝手に決めつけ、生徒の授業での自由を奪ってしまっていた。後期にも実践をさせていただくことになっているが、その際には自分の前期の実践記録をもう1度よく読み返し、振り返りたいと思っている。その上で生徒の持っている力を信じ、生徒主体の授業作りを心がけたいと強く思った。

福井大学教職大学院客員教授 山下 忠五郎

集中講座の3日間は、静かにゆったりと時が流れていく。まことに贅沢な時間である。慌ただしい毎日の営みから解放され、この非日常的な空間でそれぞれの課題と向かい合うことができる貴重な3日間である。

夏季集中講座は、夏休み中に1サイクル3日間で3サイクルが実施された。私はサイクル1のb日程とサイクル3のa日程のスタッフとして参加した。福井大学の教職大学院は、「一人で、仲間と、全員で」「読むこと、語ること、聞くこと、書くこと」を通して解決の糸口を探るのである。なかでも、これが福大の特色

であるが、4～5名（院生3～4人＋ファシリテーター）の小グループで語り合う時間をとっても大切にしている。性別・年齢・校種の異なるスクールリーダーと若いストレートマスターがそれぞれの実践の中で生まれてきた課題や悩みを語り合うのである。例えば、現状を変えることへの抵抗や拒否という壁にぶち当たって悩んでいる者、職員の年齢構成の偏りから生まれる指導上の問題を抱えている者、自己肯定感を高めるための具体策を模索している者等々である。この語り合いを通して解決の手がかりとか方向性が見えてくるので

ある。

また、各サイクルの2日目には特別ゼミが設定されている。今夏のサイクル1bでは吉村治広氏による「音楽教育の課題と価値」、3aでは渡邊本爾氏による『「詩を読むこと」と「詩を書くこと」』であった。このゼミは知識や教養を深める内容であり、張り詰めた気持ちがホッと和らぐ瞬間である。私はいつも楽しみにしている。

今年の夏季集中講座で最も印象に残っていることは、次の言葉である。「本（実践記録）を読み、まとめることは大変だったが、書くことの意味が理解できた。実体

験を通して価値を知ることにはしんどいけど面白い」これは、あるスクールリーダーの感想である。集中講座の意義はここに集約されると思う。

院生のみなさん、連日の猛暑の中を9日間という長丁場の集中講座ご苦労さまでした。特に、スクールリーダーのみなさんは夏休みの多忙な校務を縫っての受講大変ご苦労さまでした。みなさん、それぞれの目的を達成することができでしょうか。今後ますますのご活躍を…。

院 生 紹 介

4月から、院生一人一人に自己紹介の執筆をお願いしてきました。執筆してもらった4月からずいぶん時間が経ってしまいましたが、平成23年度入学生の紹介は今号が最終回です。

前田 恵子 まえだ けいこ

今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学しました前田恵子です。現在、藤島高等学校で長期インターンシップをさせていただいています。専門は家庭科です。インターンが始まって1カ月が経ちました。まだまだ分からないことばかりですが、期待が大きく、様々なことを楽しく学んでいきたいと思っています。

学部時代には探求ネットワーク活動をしていました。私が“教育”に興味を持つようになったのは、この活動がきっかけです。子どもたちの可愛さに気付く、共に活動することに楽しさを感じながらも、子どもたちとの活動を組み立てることの難しさに悩み、指導者側の立場を考えるようになりました。毎回全力で挑む探求の活動を通して、子どもたちに何を伝えたいのか、何を学んでほしいのか等、自分の中にブレたくない軸を持つよう心掛けるようになりました。このことは今も、これからも大切にしていきたいと思っています。

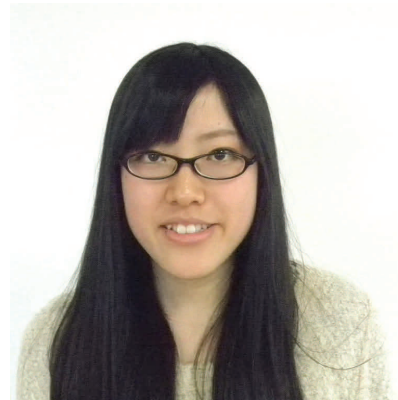
私にとって“教師”という職に関心が向き始めたのは、4年次の副実習でした。それまでは、子どもと関わることは好きで、教育にも興味はあったけれど、教師に一体何が出来るのか、全く分かりませんでした。教師になって自分が成長できるなんて、児童生徒を変えられるなんて思ってもいなかったのです。しかし、副実習で出会った先生は、私が想像していた「教師」ではありませんでした。日々の小さな指導においても、授業の内容においても「今」だけを見た指導ではなく「これから」を見据えた指導でした。児童生徒が自ら考え、その先にあるものを見つけられるような

指導をされていたのです。副実習を通して、教師の力とは一体何か、どのような可能性があるのか考え始め、興味を持ち始めました。まだ、自分の中で明白なものは見つかっていません。

だからこそ、教職大学院のインターンシップを通して自分なりの教師の力を見出していきたいと思い、本大学院に進学する事を決めました。

授業についても、ただ教科書をこなす授業ではなく、意味のある授業を展開したい、今だけの学びではなくこれからつながる学びとなるような授業を展開したい、と考えています。教職大学院ではブレない軸を大切に授業作りを考えながら、インターンを通して教師の力についても考えていきたいと考えています。

これからの2年間に有意義で、多くの学びがあったと言えるように、学ぶ気持ちを大切にしながら、毎日を大切にしていこうと考えています。共に学ぶ仲間や先輩方、先生方にはご迷惑をかけるかもしれませんが、皆様どうぞよろしくお願いいたします。



拠点校・連携校 だより

福井市中藤小学校

スクールリーダー養成コース2年
伊東 直子

中藤小学校では、めざす授業を「学びの発見」「学びの転換」「学びの広がり」のある授業ととらえ、このような授業をつくるために「学習課題」の吟味を行っています。子どもたち同士が学習課題について活発に話し合う、対話型授業のための「課題づくり」について、研究部を中心に授業研究をしています。

5月に4年生で「動いて、考えて、また動く」という説明文の授業を行いました。この授業の目標は、「事実」と「説明」という二つの段落の読み分けです。このねらいに迫るために、「高野さんは「ひざを高く上げて」走ることは、「よい」と言っているのだろうか、「よくない」と言っているのだろうか。」という最初の課題を設定し、それについて話し合わせることで、第4段落には第3段落に書かれてある事実から高野さんが考えたこと、すなわち説明が書いてあることに気づかせたいと考えました。入り口の課題を「よい」か「よくない」かとシンプルなものにすることによって、いつもはほとんど手を挙げない児童も、文章の中から根拠を見つけ、自分の意見を言葉にすることができていたように思います。しかし最後の感想を読むと、初めの課題から離れて高野さんが本当に言いたかったことに気づいている児童もいるが、初めの課題から離れられずに「よい」「よくない」に最後までこだわっている児童もいました。どのようにして、取り掛かりである入り口の課題から授業の本質的な課題に児童を導いていけばよかったのか。AかBかを話し合う中で、新たなCという視点にどう気づかせていくのか。「入り口の課題」から「出口の課題」への展開の難しさを改めて感じた授業となりました。

また本時では文の内容をイメージとして膨らませるためにペープサートを動かしてみたり、どの文について話し合うかを焦点化するためにセンテンスカードを用意したりして、教材の視覚化ということを試みました。一つのペープサートの動きをみんなが同時に見ることで、集中して内容の理解ができたと思います。またペープサートだけでなく、前時までに見た世界陸上のビデオや体育の授業での四百メートル走の体験などもイメージを広げるのに役立ったのではないかと思います。

ます。こうして一人一人が持ったイメージを支えに、第3段落と第4段落のセンテンスカードを「よい」と「よくない」に分けていく作業をしました。センテンスカードを分類したり、並び替えたりする力は、他の説明文の読解にも役立つ力になっていくと思います。また第一教材「大きな力を出す」を段落ごとに分けて書き、「筆者の考え」「事実」「説明」の表示をつけて教室に掲示したことも学習を振り返る点で有効でした。説明文においてこのような教材の視覚化、焦点化は、説明文の論理的な読み方を指導していく上で、有効な手だてであったと考えます。

また本学級は全体場で発表できる児童が限られているため、ペア学習を取り入れました。授業中の発言率を上げ、全体場で発表するときの抵抗感を少しでもなくすることがねらいです。また立たせて話し合うことで自然に声が大きくなり、黙っている児童が少なくなること、話し合いが終わったら着席するので、どのペアの話し合いがまだ終わっていないか把握がしやすいなどの効果も考えられます。本時では課題に対する自分の考えを相手に伝える、というペアでの話し合いでしたが、単に自分の考えを相手に伝えるような活動だけでなく、課題の答えを二人で話し合ってみたり、課題の解決の方法をペアの子に伝えたりなどいろいろなペア学習が考えられます。本時の授業ではペアでもなかなか自分の意見を話せていない児童もいましたが、本時では話せなかった児童も、相手の考えを聞くことによって考えの持ち方が分かり、今後の授業の中で自分なりの考えを持てるようになっていくことを期待したいと思います。ペア学習で伝える相手を明確にすることによって、中身の濃い話し合い活動ができるようになることを目指したいと思います。また、ペア学習で培った話し合う力を全体場でも発揮できるよう、支援していきたいと思っています。

大学院ではこのような対話型授業のための「課題づくり」について、もっとこれから研究をしていきたいと思っています。そして、子どもたち一人一人が伝え合い、つながり合う授業づくりを研究していきたいと考えています。

福井市豊小学校

スクールリーダー養成コース1年
中谷 幸子

共に学び合う子どもたち、そして、共に学び合う教師集団を目指して

豊小学校の正面玄関の左側には、大きな「くすの木」があります。この「くすの木」は100年以上前からずっと、朝は元気に登校してくる子どもたちを出迎え、帰りは笑顔で友達と下校する子どもたちを見送っています。豊小学校のシンボルツリーともいえる「くすの木」には、「子どもたちが、たくましく、すくすくと成長するように、また、自分の命も他の人の命も大切に、自然にも人にも優しくできる子に育つように」という願いが込められているそうです。130年以上の伝統をもつこの豊小学校には、こうした「くすの木」にも象徴されるような地域の方々や保護者、私たち教師の願いが受け継がれているのです。



豊小学校の「くすの木」

豊小学校に今年度赴任し、まず思ったことは、先生方の子どもたちに対する温かい声かけや接し方でした。子ども一人一人を大切にしようという思いは、授業だけでなく、学校生活のいろいろな場面で感じられました。また、地域の方が「まちの先生」としてクラブや体験活動に積極的に参加してくださることに驚きました。例えば、6年生の伝統文化体験では、「剣道、柔道、相撲、水墨画、生け花、琴・三味線、着付け、お茶」といった、たくさんのコーナーをすべて「まちの先生」が担当してくださいました。また、理科園や学校園のお世話を毎日のように心を込めてしてください方もいます。まさに、「地域の人に守られ、育てられるみのりっ子」なのです。

この、「みのりっ子」を私たちは、「共に学び合い、くらしに生かす子どもたち」の研究テーマのもと、見通しをもち、学びを活用する子を育てていこうと研究を推進しています。そして、授業改革を中心とした自主研究の重点項目として、次の3点を掲げています。

①「学びに見通しをもち、一人一人が主体的に学習に臨む授業づくり」

児童が学びに見通しをもつためには、学習のゴールが見え、それにつながる学習の流れをあらかじめ示すようにすることが大切です。児童自身が、学習課題や学びに見通しがもてれば、主体的な学習の仕方が身に付き、学習習慣の確立にもつながると考えます。子どもにとって学習の流れがわかり、ゴールが見える学習過程を構想するためには、教師自身が単元でつきたい力を明確にした上で、生活の中から学習課題を引き出し、解決のための学習活動を構成することが必要とされます。そのための効果的な学習課題について、各部会において授業研究を進めています。

②「表現力・活用力を育てるための言語活動の充実」

本校では、以前より話し合い活動を重視した授業改革を進めてきましたが、さらに「話すこと」「聞くこと」「書くこと」をより綿密に関連させ、相手意識をもった意見、感想交流の場の設定のもち方を考えています。そうすることで、友達の意見に付け加えたり、比べたりして発表することができるようになり、話し合いがつながるようになってきました。

③「学習を活用し、伝え合う交流の場の設定」

児童の中には、伝え合う活動の中で、自分の考えをもっているのに全体の間では発言できない児童もいま

す。また、一部の意見や考えで話し合いが進み、意見の交流が活発にならないときもあります。そこで、単元を構成するときに、伝え合う場の効果的な位置づけを考え、少人数、小集団でのグループ活動など、伝え合う場を多様化し、お互いの考えを認め合い、深め合うことで多くの児童を主体的に学習に参加させたいと考えています。さらに、その話し合いの場を授業のみならず、委員会や集会活動、そして、学校行事などのあらゆる場で生かすことも大切にしています。

こうした「見通しをもち、学びを活用できる子どもたちを育てる」ための授業づくりに向けて、私たち教師集団も共に学び合う場を大切にしています。授業を核とした校内研究会においては、小グループでの話し合いで出された意見をもとに、全体での話し合いに移ります。小グループでの話し合いのもち方は、その教科の特性に応じたものですが、そこで、最も大切にしていることは、子どもたちの発表やつぶやきから、子どもの学びをみとるということです。子どもの学習の様子を複数の目で見てその様子を共有することで、学びのあしあとが見えてくるからです。この研究会によって、私たち教師は、授業を見る目だけでなく、授業づくりで大切なものを見極める目を養います。小グループや全体会でいろいろな視点からみとった子どもたちの学びのあしあとを共有することで、今まで気づかなかった授業づくりの上で大切にしなければならないものが見えてくるのです。つまり、「共に学び合う子どもたち」を育てるために、私たち教師集団も常に「共に学び合える」ような研究の組織が確立されつつ

あるのです。今年度は、コア・ティーチャー養成事業2年目ということで、先日も1年生の算数の授業をもとに、授業づくり研究会をもちました。グループで、そして、全体会で活発な意見が出され、子どもだけでなく、私たち教師も学ぶことの多い研究会でした。この研究会で学んだことを算数という教科に限定することなく、他のいろいろな授業や学習活動へとつなげていくことができます。



10月6日「授業づくり研究会 1年算数」子どものつぶやきを共有し合ったグループ協議



6月13日「指導主事訪問 6年外国語活動」付箋紙を使って感想を出し合ったグループ協議

これからも、豊小学校では、共に学び合う子どもたち、そして、共に学び合う教師集団を目指してまいります。

若狭町立みそみ小学校

スクールリーダー養成コース2年
森北 良嗣

本校は県の嶺南地区の中央に位置する若狭町にあります。若狭町にはラムサール条約登録湿地の三方五湖、若狭湾国定公園があり、校区には三方五湖



につながるはず川が流れ、学校の名前の由来になった三十三間山があります。海、山、川、田、自然豊かな場所に学校があります。

本校の伝統となっているのが、たてわり班活動（異年齢集団による活動）です。4月に全校児童を4色（赤・白・黄・緑）に分けて縦割り班を作ります。毎日の清掃活動はもちろんのこと、年間を通して定期的なイベントが組み込まれ、活動が行われます。体育委員会によるリレー大会、保健委員会によるクイズ大会、総務委員会が主催するお楽しみ集会がその一部で、中心となるのが9月に行われる体育大会です。4色対抗で行われ、チームの団結力が試されます。応援合戦ではみんなで心を一つのものを作ります。

各学年の学習発表会も子どもたちの関係を深めています。子どもたちは業間や、感謝の集い、6年生を送る会で学習の成果を発表します。それぞれの学年のよさを認め合える場になっています。

このように、子どもたちがふれあい協働することにより楽しい学校生活が送れるようなシステムが作られています。この中で、高学年はリーダーとして果たすべき役割を知り、低学年は学校に慣れ、楽しく学校生活を送ることを学んでいるように思えます。このような良き伝統を大切にしなければならぬと考えています。

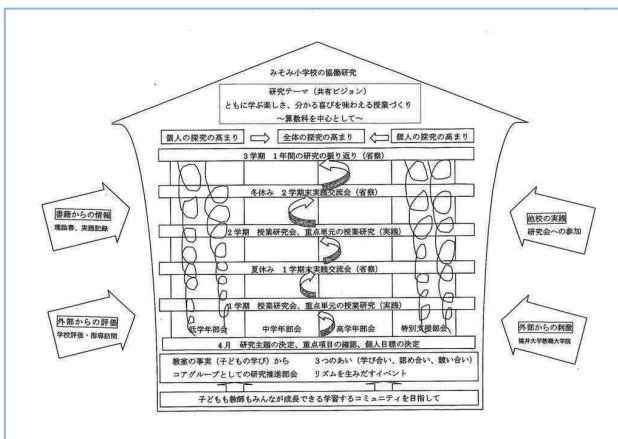
本校のグランドデザインは「自ら学び、たくましく生きるみそみっ子の育成」で、目指す子ども像は「自ら学ぶ子」「心豊かな子」「心身の健康な子」の3つです。「自ら学ぶ子」の育成をめざし、研究主題を「ともに学ぶ楽しさ、分かる喜びを味わえる授業づくり～算数科を中心として～」と設定しています。研究主任として下記のような体制をつくり、協働研究をコー

ディネートしたいと考えています。

- (1) すべての教師が探究活動を通して成長できるようにする。
 - ・研究主題に基づいた個人課題を持ち研究に取り組む。
 - ・年間に一人1回以上授業を公開する。
 - ・実践を記録し語り合い、実践と省察を繰り返す行う。
- (2) 小グループによる学び合う場を設定する。
 - ・普段の研修会を少人数の4つの部会（低学年、中学年、高学年、特別支援）で行う。
 - ・授業研究会を小グループのワークショップ形式で行い、子どもの学びを中心に話し合う。
 - ・夏休みと冬休みに小グループで「実践交流会」を行う。
- (3) みんなが協働して研究できるようなビジョンを共有する。
 - ・新学習指導要領の主旨を理解するための研修や先進校の実践を検討する。
 - ・先生方の実践を理論と結びつける。
- (4) 外部からの刺激を取り入れ、研修を活性化させる。
 - ・教職大学院の先生方と一緒に授業研究会を行う。
 - ・読書、他校の研究会への参加を勧める。
 - ・外部からの評価に耳を傾け、改善をすすめる。

「実践交流会」は本校の研究の中心となります。夏休みと冬休みに部会のメンバーをばらばらにし、男女混合4人のグループを作ります。そこで1学期や2学期に自分の課題に基づき実践したことを、一人30分程度で発表し、意見を交流します。交流会での学びや気づきから次の学期の課題を見つけ、各自、また探究活動を続けていきます。先生方は前向きに取り組み、その価値を感じています。

このような協働研究に対する考え方が伝統としてみそみ小学校に残り、今後も学校づくりや学級づくり、授業づくりにも生かされていけばよいと思います。今後も協働して実践と省察を繰り返しながら、みんなが成長できる楽しい学校を作っていきたいです。



越前市武生第三中学校

スクールリーダー養成コース2年
坂下 博行

本校は越前市のほぼ中央部に位置し、校区内には市庁舎やJR武生駅があります。今年で創立60年を迎え、先日は創立60周年の記念式典も行われたばかりです。特別支援学級も含めて14学級、生徒数378名の中規模校です。

本校の特色の1つはボランティア活動がさかんなことです。一年間にいくつかのボランティア活動に参加していますが、その中でもっとも大きなイベントが、菊花マラソンボランティアです。越前市の市民行事である菊花マラソンは本校のグラウンドがゴール地点になっていることもあって、もともとはゴール集計や本部補助などの活動をお手伝いしていたのですが、9年前からは福祉協力校となったこともあって、視覚障がい者のランナー（ブラインド・ランナー）の伴走やマラソン前後の介助も行うようになりました。ハーフマラソンの21km強の距離をいくつかの区間に分かれて、リレー形式で伴走ロープをつないで、ランナーの補助を行います。この伴走ボランティアの経験で得るものは大きく、教育的効果は非常に高いものになっています。



本校のもう1つの特色はICTを活用した授業づくりに力を入れていることです。全教室に校内LANが整備され、各

教室に1台の割合でプロジェクタ、実物投影機、マグネット式のスクリーンなどのICT機器が配備されています。20・21年度には、県視聴覚教育研究部の研究指定校となり、「ICTを活用した楽しくわかる授業をめざして」というテーマで研究発表大会を実施しました。2年間の実践・研究を通してICTを活用した授業づくりが進められ、現在ではチョークや黒板を使うのと同じように、授業で当たり前のように活用されています。その意味では、目指していたICT活用の日常化は進んできたと考えています。

22年度からは「授業づくりを学び合う教師集団づくり」を目指して、次のようなことに取り組んでいます。

その1つは教職大学院のクロスセッションの方式を取り入れた「みつつの会」というものです。この会の

ねらいは3つあります。

つたえる…… 教員が持っているスキルや知識を縦（世代）と横（周り）に広めていく。
つながる…… 授業について、学級のことについて、学年を横断して話し合える雰囲気をつくる。
つくっていく… 武生三中のチーム力をつくっていく。

2ヶ月に1度の割合で実施していますが、毎回、学校の状況に合わせてテーマを設定して、少人数のワークショップ形式で話し合う機会としています。これまでに次のようなテーマで話し合っています。

- ・今までに手応えを感じた授業、生徒に力をつけることができた授業はどのようなものであったか
- ・ちょっと困った（困っている）生徒にどのような授業を展開していけばよいのか
- ・こんな三中生にしていきたい
- ・授業の中で気になるあの生徒
- ・あの先生のあのスキル、この先生のこのスキル、
- ・三中教員のみんなの財産として共有化しましょう

普段は学年単位で活動することが多い中学校ですが、この「みつつの会」の場では、学年や教科、年齢の壁を越えて活発な話し合いが行われています。また、教職大学院でのクロスセッションがそうであるように、自分の考えを言語化して他者に語ることで、実践の省察が行われていきますし、他者の語りを聴くことで暗黙知が共有化され、多様な視点を得ることが出来る機会となっています。

また、この2学期からはお互いの授業を参観し合う授業公開週間を設定しています。今年度は5名のベテラン教師が授業を公開し、全員がどれかの授業を参観し、放課後にミニ研究会を開くという方式をとります。さらに、次年度は全員が授業を公開し、お互いに参観し合うという方式をとる予定です。

ゆっくりとした歩みではありますが、本校が授業づくりを学び合う学校となってきているという手応えを感じています。

特集：学びを拡げる多様な活動 ～学会・視察報告～

7月から9月にかけて、福井大学での日本教師教育学会の開催をはじめ、教職大学院のメンバーが国内外の学会で研究発表を行ったり、視察によって情報収集やネットワークづくりを行ったりする機会が多くありました。そのいくつかを紹介してもらいます。

日本教育心理学会第52回総会

実践研究から生み出されるもの

福井大学教職大学院 岸野 麻衣

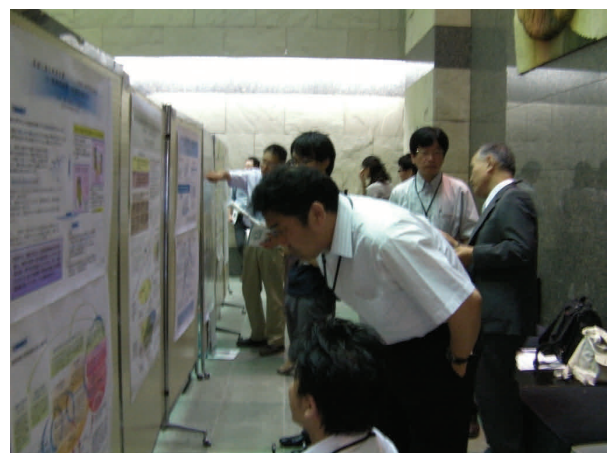
7月24～26日、日本教育心理学会第52回総会（北翔大学・北海道学校心理士会主催）が北海道札幌市（かでの2・7）で開催されました。教職大学院からは、学会員の松木・木村・岸野が参加し、一連でポスター発表も行いました。参加者を代表して、様子をレポートします。

私たちは、「長期にわたる実践を書くことの意味」というテーマで、(1) 教師としてのアイデンティティの再構築、(2) 学校づくりと同僚性の構築、(3) 重層的省察による実践の編み直しという3つの視点に分かれて、一つの長期実践報告を分析した結果を発表した。その一部は、教職大学院の夏の集中講座や教員免許状更新講習の中でも紹介をさせていただいた。長期実践報告を書く中では、長い実践の営みを振り返ってその大きな筋道をたどり、過去の経験を意味付け直して教師としての歩みを捉え直し、また実践につないでいくということが起きていることや、学校での協働の実践であるため、実践研究を進めていく中で同僚との関係の再構築や授業実践の編み直しもなされていくことが明らかにされた。発表には、他の教職大学院の教員や学校教育・教師教育に関わる研究者・実践者が聞きに来てくれ、院生は教職大学院で何を学び、それがその後につながるのか、「子どもの学び」という視点が院生にどのように受け取られ取り入れられるのか、実践研究の意味やその方法論はどうあるべきかなど、様々な角度から問いをいただき、改めて考えさせられた。今後の研究につなぎ、学界の中でも発信や問題提起を行っていったらと思っている。

学会では、様々なシンポジウムや講演も行われていた。教育心理学会は、教育心理学の研究者だけでなく学校等の実践者の会員も多く、また学会誌にも「実践研究」の枠があり実践に根付いた研究を発展させていこうとする動きがある。私が参加したシンポジウムや講演でも、研究者と教育実践の関係を再考する報告や、実践の展開を理論化した報告を聞くことができた。私がシンポジウムで印象に残ったのは、教育心理学者が実践研究に携わる際に実践を安易に一般化せずに、授業

で用いられる教材や教科内容等の実践の具体性に踏み込んで議論していく必要があるのではないかという問題提起だった。今後様々な学校での授業研究会に参加する中で自分なりに考えていきたいと思った。

また、ヘルシンキ大学（フィンランド）のエンゲストローム先生の講演は大変興味深いものだった。自宅介護場面の介護者と被介護者の相互作用や両者の語り分析され、特に「立ち上がる」ことを巡って「動ける」とはどういうことか、両者の間で交渉しながら合意がなされていき、お互いに抱えている葛藤と上手につきあひながら介護実践が展開していき、生活が改善されていく過程が示された。「動ける」ということを共に概念化していったことが鍵となっており、このように相互作用の中でその後の展開につながる要素が凝縮された核となる“germ cell”（杯細胞）が生まれ、芽を出し花を咲かせるように多様な形で展開していくということだった。私たちの実践において、“germ cell”は何だろうか、「子どもの学び」もまたそうだろうか、など考えさせられ、実践を捉えるヒントをいただいたような思いだ。



理科教育学会全国大会

福井大学理数教育講座 石井 恭子

8月20,21日に、島根大学で行われた日本理科教育学会全国大会に出席した。全国大会は毎年夏に各地の大学を会場に行われ、講演やシンポジウムのほか、全国から集まった教員や研究者による実践や研究の発表が行われている。3年前には福井大学でも、現仁愛大学教授の伊佐公男先生を会長に開かれ、700名を超す参加があった。研究発表には、小・中学校の教員による実践報告も多く、実際の授業の様子を見て今後の実践のヒントを得たり、似たような実践をしている仲間を見つけたりすることもできる。また、大学院生や研究者による研究報告では、授業で交わされた発話分析、教材や指導法の開発などがあり、新しい視点を獲得する機会となる。

私は、同じ理科教育講座の山田吉英教員とともに「小学校教員養成課程における模擬授業の意味」を発表した。大学における模擬授業は、大学生同士が教師役と児童役に分かれて授業を経験してみる、というもので、来年度から大学の教員養成課程で全国的に始まる教職実践演習でも模擬授業を取り入れることが明記されている。授業を作ったり受けたりする経験を通して、実践的な授業の力量をつけることが期待されているのである。しかし、発問や板書など教師役の経験への関心の方が高いため、児童役として参加する意味を明確に持たせることが課題である。指導案通りに授業を進めることができたかを評価する立場でもなく、小学生の振りをして振る舞ってあげるのでもなく、児童役が主体的に



「福井の地域人材を生かした理科教育研究」
2010年、理科教育学会

参加することで、学ぶ側の視点をもって授業について議論できるよう、班編成や90分の授業構成、議論の進め方など、授業の工夫を重ねてきた。発表では、同じような取り組みを始めている大学教員と議論することができ、さらなる改善の視点を獲得することができた。こうした発表や議論を通して、私たちの教員養成の授業も、小中学校の授業と同じ、省察と実践の繰り返しなのだということが強く感じた。

理科教育学会の楽しいところは、企業による実験道具の紹介や、ワークショップなども活発に行われていることである。開発した実験道具を実際に触ってみたり、サンプルをもらったりすることができる。ポスターセッションや企業展示のブースは、いつも実験道具を前に実践を交流し合う姿でにぎわっている。昨年の山梨大会では、研究指定を受けることができたので、福井市の先生方と一緒に、福井市自然史博物館や福井市气象台との連携授業の取組を報告したり、開発したスピーカーの実験をポスター発表したりすることができた。

空いた時間に近くを散策したり、夜の居酒屋でご当地の名産をいただいたりするのも楽しみだ。今年は、地元の友人に案内してもらって出雲大社にも足を延ばすことができた。年に一度の全国大会は私にとって、仲間と刺激し合い、自らの実践研究を振り返り、視野を広げる大切な場となっている。



日本教師教育学会第21回福井大会を終えて

福井大学教職大学院 森 透

去る9月17-18日(土・日)の両日、福井大学にて日本教師教育学会第21回大会が無事終了しました。参加者数は約320名で地方大会としては非常に多い参加人数でした。大会テーマは「教師の専門職としての力量形成を支える学習コミュニティ (professional learning communities)と大学の役割 —大学と学校との協働研究の展望を探る—」。記念講演はハッカライネン (Pentti Hakkarainen) 氏 (フィンランド・オウル大学カヤーンニ校教授)、シンポジウムはコーディネーターが岩田康之氏 (東京学芸大学) と松木健一氏 (福井大学)、シンポジウムが高間祐治氏 (福井大学教職大学院拠点校: 福井市至民中学校研究主任)、大脇康弘氏 (大阪教育大学大学院教授 <夜間大学院>)、望月善次氏 (盛岡大学学長) の3名で

した。ハッカライネン氏の通訳は北田佳子氏 (富山大学) にお願いましたが、抜群の通訳でした。

ハッカライネン氏は自国フィンランドの教育について世界的に注目されているが、実際は様々な課題を抱えていることを強調されていたことが印象的でした。3人のシンポジウムの報告はそれぞれ個性的で興味深かったのですが、高間氏に至りまでの特徴をわかりやすく報告されていました。大脇氏は大阪教育大の現職院生とのコラボレーションの醍醐味と抱えている課題を率直に語られ、福井大教職大学院ではどうでしょうか、と投げかけられたこと、現職の先生方の課題や思いとそれに対して大学院は何をすべきなのか、カリキュラム構成の点も含めて考えさせられました。望月先生が

最初に東日本大震災の写真と映像を流されたことも印象深いものでした。

自由研究発表は私自身ほとんど聞くことができなかったのですが、福井大学から4つの発表がありました（フィンランドの教員養成、ライフパートナー、教職志望学生への支援、教職大学院のインターンシップ）。私はインターンシップの発表だけを聞くことができましたが、松木・笹原両会員がインターンシップの全体構造と具体的事例を丁寧に報告され、参加者の注目を集めていました。

1日目の夜は情報交換会（懇親会）の参加者は100名を超え、会場の11講義室と12講義室が満杯の状態でした。耐震工事の関係で食堂が閉鎖で会員の皆様には大変ご不便をおかけしたのですが、たくさんの方々が料理とお酒を味わっていただいたことに深く感謝したい

と思います。津軽三味線の佐藤さん（附属幼稚園育友会役員）の演奏と語りは素晴らしく、東北地方の被災地への思いを込めたものでした。

2日目の特別課題研究「東日本大震災から学ぶことー現地からの発信をもとに、学会として考えるべきことー」は3月11日の大震災後の現地からの報告と学会として何を学び何をすべきなのかについて考える場でした。私はこれだけは参加したいと思い参加しましたが、東北大学・福島大学・盛岡大学の3報告は生々しい現場からの内容で重くて貴重な報告でした。司会された神戸大学の会員は阪神・淡路大震災の経験を踏まえて議論をリードしてくれました。9月22日の「福井新聞」に記事が掲載されました。（19頁に掲載）

「新たな可能性と原点に学ぶ」ISCAR第3回大会に参加して

福井大学教職大学院 杉山 晋平

2011年9月5日から10日までの6日間、ISCAR (International Society for Cultural and Activity Research) という国際学会の第3回大会がイタリアのローマで開催された。この学会は、ロシアの発達心理学者であるエリ・エス・ヴィゴツキーとその同僚たちが提起した理論的視座への関心を共有しながら、人間の実践を社会的・歴史的次元で捉え、そこで生まれる学習と発達の姿に迫ろうと試みる各国の研究者で構成されている。今大会も、その理論的伝統を引き継ぎながら、多様な実践現場と学問領域を横断し、新しい世代の研究を世界的規模で発展させていくことを志向したプログラムとなった。

著書が邦訳され国内でも参照されることの多くなったユーリア・エンゲストローム氏らの研究チーム、本大会終了後の日本教師教育学会で来日されたペンティ・ハッカライネンとミルダ・ブレディクト両氏、また『コミュニティ・オブ・プラクティス』（翔泳社）の著者であるエティエンヌ・ウエンガー氏のかつての共同研究者であるジーン・レイブ氏はじめ著名な研究者も多く参加されていた。

今回の大会も、内容・形態ともに実に様々なセッションが用意されていた。私が中心的に参加したのは、自らの研究テーマに関連の深い「多文化状況、あるいは実践共同体間の移動と人間の学習・発達」を扱ったセッションである。

数の実践共同体の重なり、その境界を横断しながら生きていく人間の移動の軌跡。そして、そのような移動を通じて生じる実践共同体そのものの変容。そのような連関を通じて移動主体である人間自身が学び発達していく過程にせまった数々の実践研究からは、学校現場と教職大学院を結ぶ福井の学校拠点方式の取り組みにおいて経験されている学びを考えていく上でも重要な示唆が得られた。

全ての参加者が一堂に会する基調講演では、最終日のジーン・レイブ氏の提起が大変印象深かった。それは、ISCARでも多岐にわたって展開される実践研究の原点について再考を迫る内容であった。



講演の中で氏が引用したのは、人間と環境の弁証法的関係について規定されたカール・マルクスの『フョイエルバッハのテーゼ』の第3命題である。私たち人間は、特定の環境の中で生まれ形成されていく存在であるが、その環境もまた他でもない人間によって歴史的に形成されてきたものである。人間に固有の本性(nature)とは、両者の変更が帰一する変革的実践(revolutionary practice)にみることができる、というのがそこで示されている原理である。

ヴィゴツキー並びにその後の理論的展開の原点にあるマルクスの思想に立ち返りながら、氏が伝えようとしたことは何であったのだろうか。私が受け取ったメッセージは、2つある。まず、「具体的な人間を研究せよ」という当然のメッセージである。それは、環境の中で生きながら、その環境を維持・更新していくという人間の歴史的な“運動”を指しているように思われる。しかし、ともすると、足繁く現場に通い綿密な調査を進めていると過信して、自分の理解の枠組みの範囲内で、活動から切り離されて真空に固定された人間なるものを勝手に想定し「かくあるべき」と理解したつもりになってはいなかっただろうか。

次に、私たち自身の研究という営みもまた、例外な

く社会的な「実践」の1つであるというメッセージである。研究という「実践」もまた環境からさまざまな制約を受けて成立しているのだとすれば、自分はそのような制約の中で研究をつくりだそうとしているのか、そして、果たして研究とはいかにして環境の歴史的形成に関与していくことができる「実践」たりうるのだろうか。

これらのメッセージは、優れた教育実践を支える輪の中に身を置くことで教師教育の従来の想定を問い直し、理論と実践を分かち難く結びつけて新しい知の生成に取り組んでいる教職大学院の挑戦に符合しているという直観を抱いた。

さて、国際学会の参加は3年ぶりとなったが、以上のように新たな可能性を予感しながら、自分の足元をふりかえるという有意義な機会を得ることができた。他方で、2本の研究発表の機会をいただいた私は、苦手な英語に悪戦苦闘の連続だった。

大会初日にプレ・カンファレンスとして企画されたPhD Students' Dayでは、経験豊富なシニア・リサーチャーの助言を得ながら、博士論文の作成に取り組んでいる参加者が互いの実践研究を持ち寄って発表しあい、終日じっくりと議論を交わすという、ハードだが贅沢な時間を過ごした。この経験を分かちあった仲間が、世界のどこかで今日も必死に研究に取り組んでいると思うと、力が湧いてくる。またもう1本の発表では、北アイルランドの研究者との共同発表に挑戦するという初めての経験を得た。互いの国を行き来し、そこで浮かび上がる差異も前提としながらも問題意識を共有して、対等な関係の上で研究を進めていく。苦手

な英語だからこそ懸命にコミュニケーションを図る中で、研究者であるということは他でもなく「私」の声を表明することであり、「私」という人間を理解してもらうことなのかもしれないと感じるようになった。

第4回大会は、3年後の2014年、開催国はオーストラリアである。次回は、この福井で得られた出会いを通じて学んだことを発信し、それを通じてより広い視点から福井で取り組みの意義を学べる機会となるよう、教職大学院での日々を打ち込みたい。



知識社会における教職と学校の使命

－ アンディ・ハーグリーブス教授との面会報告 －

福井大学教職大学院 木村 優

はじめに

2011年9月、アメリカはボストンカレッジ教育学部リンチスクールを訪問し、同校のアンディ・ハーグリーブス教授と面会してきた。ハーグリーブス教授は教育社会学、特に教師研究の領域で世界的に著名な研究者であり、教職専門性、教師の情動、持続的リーダーシップ、学校における同僚性の形態および専門職の学習コミュニティなどを研究対象とし、教育学研究や教育政策に対して幅広く重要な知見を示し続けている。また、ハーグリーブス教授は2003年に出版した著書、『知識社会に

における教職の在り方(Teaching in the knowledge society)』で、知識社会を迎えた現在の教職、学校が抱える難題と使命について論じている。今回、私が教授と面会した目的の1つが、同書の内容に基づいて教職専門性研究の動向や教師教育改革の現代的課題について議論することであった。

そこで以下、ハーグリーブス教授との議論で話題に上がった教職専門性、同僚性、専門職の学習コミュニティ、という3つの論題について報告する。

教職専門性における合理性と情動性

多くの研究や論考により教職専門性の定義や性質がこれまで示されてきた。しかし、そこでの議論では、教師の実践的知識や思考様式の特徴といった「教えること」の認知的側面が多く取り上げられ、教師が学校や教室の中で生徒たちと係わり、生徒たちをケアし、その係わりとケアリングの活動から生起する多彩な情動も含み込んだ「教えること」の関係性的側面については取り上げられることは少ない。この点についてハーグリーブス教授は「日本も同様だが、欧米の教職スタンダードには教師の情動が反映されている」と言い難い。これは、研究レベルでも政策レベルでも、未だに教職を合理性 (rational) という基準のみで捉えており、この点は教師の専門的生活の複雑性、複合性という視座から見れば問題である」と述べ、続けて「今

後、教師の情動、ケア、関係性という視点を含めて教職専門性を議論していかなければならない。それは知識社会が進行し拡張する現代の課題だ」と述べていた。

欧米では、1980年代頃から教師のケアや情動研究が漸増的におこなわれるようになり、現在までに一定の知見が蓄積されてきている。しかし、教師の認知研究に比べればその数は圧倒的に少ない。この動向は日本でも同様である。今後、教職専門性において情動性をいかに位置づけて議論を展開するのか、そして、教職専門性における合理性と情動性との交互作用、混在、さらには統合をいかに示していくのが課題と言える。

同僚性の一形態：自在に動くモザイクとは？

ハーグリーブス教授は1994年の著書、『変わる教師、変わる時代 (Changing teachers, changing times)』で、学校における同僚性について論じた。その中で、同僚性の一形態として示された「自在に動くモザイク (the moving mosaic)」(図1)について詳細を尋ねたところ、教授は快く丁寧に説明して下さった。

ハーグリーブス教授はカナダ・オンタリオにある先進高校の事例を示しながら、「自在に動くモザイクの同僚性は、まず集散的・集団的な責任 (collective responsibilities) に基づく」と言う。これは、学校運営と生徒の成長に関わる全ての成員が「共通のヴィジョン (common vision)」を持つこと、そして、「全ての成員がそのヴィジョンの実現に向かって進む、学校の『大きな絵 (big picture)』の中に含まれること」を意味する。

さらに、ハーグリーブス教授は、イングランドサッカー・プレミアリーグで成功した小さなクラブチームを例に上げた。そのチームには才能際立つ選手はいなかった。しかし、怪我や退場などである選手が抜けたとき、他の選手がその抜けたポジションでプレーすることができた。教授は、「サッカーにはFW, MF,

DF, GKとポジションがあるが、そのチームでは多くの選手が複数のポジションでプレーできた。小さなチームだからこそ、互いの仕事を補い合えた」と述べ、対比して「1つのポジションだけをプレーする選手が11人いるチームでは、誰かが抜けたらそこは穴になり、チームとして機能しなくなる」と言う。

組織に共通のヴィジョンがあり、そのヴィジョンの実現に向かう大きな絵の中に全ての成員が含まれること、そして、成員間で複数の仕事を補い合えることが「自在に動くモザイク」としての同僚性である。この同僚性の形態こそが、知識社会のための、知識社会を超えていく学校に必須であると言えるだろう。

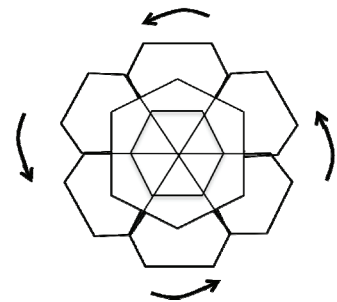


図1 自在に動くモザイク
(回転し続けるモザイク)

専門職の学習コミュニティを拡張すること、持続すること

面会の後半、ハーグリーブス教授から「専門職の学習コミュニティとしての日本の学校について知りたい」との要望があった。そこで、即興ではあったが教職大学院・拠点校の至民中学校について、校舎や授業風景の写真をノートパソコンで映しながら、問題解決型授業と協働学習の実践、クラスター制による世代間、世代を超えた学習、学校の研究体制、教職大学院・院生のインターンシップに関して報告させていた。

だいた。

ハーグリーブス教授は至民中学校の取組に強く関心をもち「ぜひ訪問したい」と仰っていただいた。その一方で、教授は「難しい質問をしていいかな」と投げかけた。その質問とは「パイロットスクールは地域の中で4つ、5つくらいはつくれるが、100もつくれるのか。また、そのような学校の実践はどのように継続できるのだろうか。実は、先のオンタリオの高校は制度

による標準化やテストスコアの要請の増大、さらに校長の交代も相まって、現在ではこれまでの実践が上手く行っているとは言い難い」とのことだった。

第1の質問に対しては「確かに100もパイロットスクールをつくるのは不可能です。しかし、例えば福井大学教職大学院では地域の先生が毎年15名程、各校で働きながら大学院に入学し、至民中学校や大学附属学校園の先生方、そして将来、教職に就く若い院生たちと交流・協働しながら省察的実践や学習する組織づくりについて学んでいます。つまり、地域の先生方はそれぞれの勤務校で知識社会の学校づくりに励んでおり、これは100のパイロットスクールをつくる以上の効果があると思います」と答えた。また、第2の質問に対

しては、(1)パイロットスクールに在籍する先生方の大学院入学を持続すること、(2)学校、地域、県、大学の連携により学校の世代間継承を支え促すこと、という教職大学院で挑戦している2点の取組を示し、「これらにより学校文化の持続可能性を担保できると考えます」と答えた。

以上の回答に対し、ハーグリーブス教授から多くの同意を得られた。それと共に教授からは「福井の実践をいかに他地域に広められるか」という課題も示していただいた。私たち教職大学院スタッフもこの課題を乗り越えて行くための方策を常に模索し、いくつかの試みは実行に移している。教授に鋭い分析力に感服した次第である。

おわりに

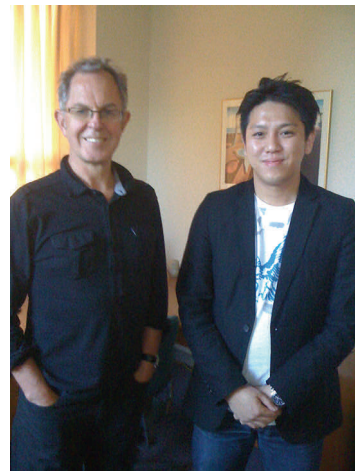
ハーグリーブス教授との最後の議論から、福井大学教職大学院の学校拠点方式、インターンシップにおけるストレートマスター院生たちの学習、拠点校・連携校の先生方の挑戦、大学と県との信頼関係に基づく連携など、これらはグローバルな視座から見て稀有な先進事例であると実感した。

今後、福井の取組を世界に発信し、グローバルな研究や改革動向の中で鍛えていく、そして、知識社会のための、知識社会を超えていく学校づくりと授業づくりをこれからも支援していく、これらの使命を強く抱いた。ハーグリーブス教授とは再会を約束し、研究室を後にした。

引用文献

Hargreaves, A. (1994) *Changing teachers, changing times: Teachers' work and culture in the postmodern age*. New York: Teachers College Press.

Hargreaves, A. (2003) *Teaching in the knowledge society: Education in the age of insecurity*. New York: Teachers College Press.



ハーグリーブス教授の研究室にて

愛育養護学校訪問

9月29日、東京都港区にある学校法人愛育会愛育養護学校を訪問しました。固定的な時間割等がなく、子どもに関わる大人が様々な面でまさに協働しながら、子どもそれぞれの思いを大事に、子どもと共に活動を作っていく学校です。訪問したメンバーでレポートします。

子どもと学ぶ

愛育養護学校では多くの実習生を受け入れている。私自身も、大学院生のときに週1日、2年間にわたって愛育で子どもたちと関わらせてもらった。今回の訪問は10年ぶり。愛育では1日だけの見学者も実践に参加させてもらえ、子どもや先生方との関わりの中で、文字通り身を持って学校の営みに触れさせてもらえる。

少し緊張しながら学校に足を踏み入れると、変わらない空気が流れていた。それぞれのペースで登校してくる子どもたち。誰だろうと警戒したような顔を私を

福井大学教職大学院 岸野 麻衣

見る子どももいる中で、ふと私の手を引いてくれた男の子がいた。お気に入りらしい絵本を持って、見せてくれる。次々とページをめくるリズムに合わせて「ドキッ」「いたい!」「もうちょっとがんばろう」「ほっ」「大変失礼しました」と台詞を読んだ。それを何度も繰り返す中で彼はバンッと私を叩き始め、思わず「痛いっ」と言うと、面白がって笑い、また繰り返す。掌で容赦なく迫ってくる彼の手を、時にかわし、時に「つかまえた」とつかみ、時に「痛いよー」

と受け…。手を引いてはいろいろな部屋に連れていってくれ、本を次々引っ張り出しては、気に入っているらしいものを見せてくれ、一緒に読んだ。移動中に私がよろけて「うわわわ」などおかしな声をあげると、よろけさせようとおかしい手を波打たせたり、自分がよろけてみたり。そのたびに「うわわわ」と声をあげて二人で笑った。

ぐいぐいと世界に引き込まれ、久々に没頭して遊んだ。自分の見たいもの、私に見せたいもの、一緒にやってみたくことが次々と現れてきて、子どもの力強さを実感した。言葉はなくとも身体や声の響きで思いを伝えあえ、二人の間に生まれた動きについて楽しみを分かち合えた。彼がこれまで培ってきた人と関わる力と、それを支えてきた周りの人たちの関わりに思いを巡らさずにはいられなかった。伝え合うとはどういうことか、言葉の持つ意味とは何か、大きな問いをもちたようにも思う。

2時半を過ぎて子どもたちがそれぞれのペースで帰っていくと、手分けして学校中を掃除して、お茶の時間。山盛りのお菓子と温かいお茶で子どもたちのことを語り合う。それぞれが子どもとの間で起きた出来事を語り、互いにじっくりと耳を傾け、子どもにとって今日の出来事がどんなものであったか、みんなで考えていく場になっていた。たとえば一人の子どもが耳を

ふさいでいたのはどういう意味があったのか、それぞれの感じたことやこれまでの経験を媒介に探っていく。そこには「こうに違いない」という決めつけも正解もなく、みんな子どもとの対話の中で見出そうとしている。そうやって一人の子どもと没頭して関わっているようで、周りの子どもや大人との関わりの可能性や動きも見えていて、長いスパンにたつて過去と将来も同時に見えている。話は尽きることなくあつというまに1時間以上が経っていた。

このお茶の時間は特別な事情がなければ毎日行われる。愛育では当たり前のこの時間が、多くの学校ではなかなか実現できないものだ、いろいろな学校を訪問する中で感じている。それは時間の設定の問題だけではない。関係性の問題も大きい。10年ぶりに訪れたこともあって、数名の先生方以外入れ替わっており、誰が先生で誰が実習生なのか、わからなかった。つまり、誰もが一人の保育者として尊重され、その関係性は極めてフラットなのだ。その真中には子どもがいるからなのだろう。私たちは子どもの学びを大事に授業研究をしていこうとしていながら、どうしても先入観をもって決めつけていたり、何をもって学びとするのか子ども抜きに語っていたりしないだろうか。課題を改めて考えさせられた。

人と人のかかわりを学ぶ ―子ども・教師がきらきら輝く学校

教職専門性開発コース2年 齊川 歩

9月末、愛育養護学校に見学に行く機会をいただき、一日ではあったが子どもとかかわりながら、愛育養護学校というものを全身で感じてくることができた。愛育養護学校では、時間が過ぎるのがとても早く感じられるもの、子どもとのゆったりとした時が流れていた。愛育養護学校の先生と一緒に子どもとかかわらせていただき、活動中は驚きの連続だった。ここでは、たくさんの驚きの中で特に強く心に残っている二つを紹介したい。

一つ目は、先生方が子どもの世界に入りこむのがとても早いということだ。この学校では、時間割で活動したり、子どもたちが集まって行動したりする機会はほとんどなく、子どもたちがしたい活動を教師と一緒に行うスタイルだった。子どもたちは自分で遊びに向かい、遊び込んで遊びを次々と展開させていた。そして教師はただそれを見守るだけでなく、一緒に『楽しい!』などの様々な思いを共有し、ときには「今度はこれしてみない?」と絶妙なタイミングで声をかけながらその子の遊びを支えていた。教師がとことん子どもの思いに寄り添うことで、その遊びをやりきるといふ経験を数多く積んだ子どもたちだからこそ、自分で遊びを見つけたり、遊び込んだり、展開する力があるのだと感じた。それは決してわがままではなく、子どもの遊びに対する主体的な姿であった。自分のやりたいことを最後までやり抜く経験は、子どもの成長の中で土台となるものなのだろう。

二つ目は、子どもたちが帰った後に、先生方でミーティングを行う。そのミーティングでは、子どもたちの一日の様子を報告し合い、子どもの行動についてみんなで考える場であった。その中で、私は一つの質問をした。「なぜ、学校であるのに“先生”という言葉が聞こえなかったのか。」その日一日、愛育養護学校の先生方は、先生同士や子どもの前で「〇〇さん」と名前呼び合い、自分のことも“先生”とは言っていなかったからだ。すると、「教師と生徒という関係ではなく、私たちは〇〇という人と〇〇ちゃんという人がかかわる、対等な立場でのかかわりを意識している。」という答えをいただいた。私はその話を聞きながら『人と人』という言葉が浮かび、何か心の中に落ちるものを感じた。対等であるからこそ、子どもの思いがわがままではなく、主体的な行動なのかもしれない。私は子どもとかかわりで、「教師だからこうしなきゃ。」と思うことがある。しかしそれは私の思いではない。一人の人間として子どもと正面から向き合っていきたいと思ったと同時に、「教師とは何か…」と考えることになった。

ここでは紹介しきれないほどのことを学び、考えるきっかけをもらった学校訪問だった。この経験を、すべてというわけにはいかないが、今後のインターンシップでの子どもとかかわりや今後の教師としての人生に生かしていきたいと強く、強く思う。

心と心で係わり合う学校

東京都の愛育養護学校において先生方や保護者の方、ボランティアの方、実習生の方と一緒に子どもたちに係わらせて頂けたことは大変貴重な体験となり、また今後の学びの種を見つけた良い機会となった。

愛育養護学校の日課は自由活動と課題活動で構成されている。子どもたちは自分の好きな活動を納得ゆくまで行き、周りの大人はその活動にとことん付き合う。とても「自由」な時間が流れていく。「勉強の時間」はないように思えるが、その活動の全てが「学び」であった。子どもたちは遊びを通して試行錯誤しながら自ら学んでいく。それは子どもの学びであると同時に、子どもに係わる大人の学びでもあった。愛育養護学校の教育目標のひとつに「自分の存在に自信を持つ力を育てる。」という目標が掲げられている。大人がとことん付き合うことで、子どもたちは自分の活動を認められる経験を幾重にも積み重ねていく。そして、自分を認めてもらう経験も同じく積み重ねている。「自分は認められているのだ。」という気持ちを何度も何度も感じることで次の活動に踏み出すエネルギーになり、かつ社会参加していく力にもなるのだ。子どもたちが周りから認められているように、私自身も「今日1日子どもたちと一緒に付き合う人」として認めてもらえた。係わったあ

教職専門性開発コース1年 合田 優

る子どもが私に手を差し出して、一緒に手をつないで歩いてくれた。「あなたを認めたよ。」という子どもの心からのメッセージが手を介して通じた。子どもたちは人と係わり合って生きることを学び、係わり手も子どもたちを通して自身を振り返り、新しい学びをする。

本校のユニークな点として、掃除はあえて大人が行う。子どもたちの帰宅後、掃除の時間を利用して子どもたちの学びの足跡を振り返るためである。子どもたちが廊下にこぼしたのや会議室の机の上に残していったおもちゃを見ながら、色んな場所で学びを展開していることを実感した。その後、日常行っているというミーティングに参加した。ミーティングの雰囲気は教職大学院のカンファレンスとよく似ていたため、心地の良い雰囲気であった。子どもたちの1日の学びの姿を追って話が展開される。どんな係わり方が良いか悪いだけではなく、どんな係わりも大人の学びとし、また子どもの学びとして捉えられている。



平成24年度福井大学大学院 教育学研究科教職開発専攻（教職大学院） 学生募集 スケジュール（予定）

出願期間 平成24年1月17日（火）～20日（金）
ガイダンス 平成24年1月28日（土）
選抜期日 平成24年2月11日（土）
合格者発表 平成24年2月21日（火）

※ 募集要項は12月上旬に県内全ての学校に発送を予定しています。

問い合わせ先：福井大学学務部入試課
〔 本学ホームページ <http://www.u-fukui.ac.jp/> 〕

平成23年度更新講習（必修領域）の実施状況報告

福井大学教職大学院 長谷川 義治

平成23年度福井大学教員免許状更新講習（必修領域）は、年間8回の開催を計画し、8月末までに6回分を終了した。特に、今年度は、「新任教頭研修講座」と関連させながら、省察型の講習を実施した。その概要を報告する。

1 はじめに

平成23年度更新講習の計画・立案の取組は、例年のとおり、前年9月ごろから始めている。昨年度は、受講者数が大幅に減少した。政権交代があり、「更新制度廃止」などと報道されたことも影響したと考えられるが、今年度はその反動も懸念されたので、県教育庁義務教育課や県総務部大学・私学振興課と連携を取りながら、受講対象者のアンケート調査をお願いした。その結果、受講者数は約700人の見込み。（平成22年度のこの段階での見込みは約300人）その結果を踏まえて、平成23年度の計画を決定し、申請・募集を行った。



2 本年度講習の変更点

本年度講習の主な変更点は、①開催回数は3回→8回、②嶺南会場は敦賀市→敦賀市及び小浜市、③福井県教育研究所の「新任教頭研修講座」と関連などである。

①については、1回分の募集定員を80人又は120人と設定し、8回の合計で840人。夏季・冬季休業中だけ8回確保できないので、今年度、新たに、土・日曜日の連続2日間+翌週の土曜日という変則3日間を2回設定した。

②については、全部で8回開催するということもあり、今年度は敦賀市と小浜市の両方で開催した。8回全体の受講者数は、2回分が残っていて確定していないが、約600人の見込みで、当初の想定をやや下回った。

③については、福井県教育委員会との連携の中で「新任教頭研修講座」の一部に位置付けてもらって実現した。実際には、「新任教頭研修講座」5日間のうちの2日間、「傾聴」の実践として、福井大学の更新講習（必修）においてファシリテーターを務めてもらった。もちろん、教育研究所での事前研修で理論の講義や、事後研修で振り返りの演習も実施させていただいた。

現在、中央教育審議会「教員の資質向上特別部会」でも、教育職員免許法の改正を議論しており、その中で、大学と教育委員会との連携を中核とする教員養成・採

用・研修の統合化を目指しているとのことである。今年度の本学の取組は、その意味でも、画期的な取組であるととらえている。

3 本年度講習の概要

「福井大学方式」の特徴を改めて挙げると、①必修12時間に選択6時間を加えた18時間（連続3日間）の講習、②少人数グループによる語り合い・聞き合いを基本にした「省察型」講習、③校種、年齢、教科等の壁を超えたグループ編成などである。

ただし、①については、3日間連続で受講した者の割合は47.1%で、昨年度実績34.4%と比べ、少し回復した。

また、②については、「2」でも述べたが、今年度は、「新任教頭研修講座」と関連させたこともあり、実人数で91名（現職教頭が69名、元職校長が22名）の方に協力していただいた。福井県教育研究所の担当者をはじめ、多くの関係者に対して心からの感謝を申し上げたい。

なお、受講者評価については、「講習の内容・方法」「知識・技能の習得の成果」「運営面」の3項目について回答していただいているが、6回分の「教育実践と教育改革Ⅰ」（必修）の全体平均は、「よい」が42.4%（45.2%）、「大体よい」が50.9%（48.9%）、「余り十分でない」が6.6%（5.6%）、「不十分」が0.1%（0.0%）で、昨年度とほぼ同様の評価をいただいた。（カッコ内は昨年度実績）

4 おわりに

受講者の受講の様子などは、昨年度同様で、落ち着いていた。講義中のレポートもしっかりと記述してあるし、最終レジュメも締め切り日を守って提出していただいた。受講者の協力にも心からの感謝を申し上げたいと思う。

今年度の新たな取組として、現職教頭にファシリテーターをお願いしたこともあるので、ある教頭の事後研修での振り返りを紹介して、まとめとしたい。

チームをまとめるには、リーダーシップをとって、チームの先頭に立つことも必要であるが、それだけでなく、構成員一人一人の思っていることに真剣に耳を傾け、そこからその人の能力を引き出していくことが重要であることを実感した。それも管理職としての資質であることも理解できた。そのためにも、普段から、所属職員とのコミュニケーションを大切に、話を聞くときには、相手と同じ目線で、心と目で聴くように心掛けていきたい。（小学校教頭）

教師教育ネットワーク・交流のひろば

このコーナーは、全国各地で教師教育に取り組んでいる教職大学院や既設大学院等の実践と研究を交流する広場です。今号では、東京学芸大学大学院の取り組みを紹介します。たくさんの投稿を期待しています。

東京学芸大学大学院教育学研究科学校教育専攻（修士課程）

「東アジア」的教師教育実践研究コミュニティの魅力

岩田 康之

東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター

東京学芸大学大学院教育学研究科（修士課程）は、専門職学位課程である学校教育創成専攻（教職大学院、定員30）と、その他15専攻（いわゆる既存の大学院、定員279）とに分かれている。残念ながら、今のところ双方の交流は教員・学生ともに充分とは言えず、特に東京都教育委員会が現職教員を原則として教職大学院のみに派遣する措置を採っているため、日本人の現職教員の院生は既存の大学院には比較的少ない。

日本に限らず、教員養成課程や教職大学院などの教育組織は、政府によって管理された教員資格・免許に直結するために、必ずドメスティックな性格を帯びる。特に公立学校教員は公務員身分との関係があるため、これらのコースに学ぶ学生は基本的に当該国の国籍を持つ者に限られてしまう（EUの教員も、域外の国籍を持つ者は原則としてなれない）。そのため、教員養成課程はグローバル化が進む高等教育の中で特異な場所となりつつある。

筆者は既存の大学院の学校教育専攻に所属しているが、本学は海外54大学との交流協定を結んでいることもあって教育系単科にしては珍しく外国人留学生比率が高く（既存の15専攻計731名中126名、17.2%）、国際色豊かである。特に中国メインランド、台湾、韓国、モンゴル等の東アジア諸地域からの留学生が多く、その中には小・中・高等学校の現職教員経験を踏まえて、日本に渡って教師教育について学ぶ教師たちも相当数いる（特に韓国や台湾には、現職教員が身分を保持したまま外国の大学院で学ぶ形の研修をサポートする制度がある）。これに加えてアジア諸国から教員研修留学生（文部科学省が募集して国内各大学に派遣する、一年半の現職教員向けプログラム）として共に学ぶ者もいる。

この学校教育専攻は教育哲学、教育史、教育経営学、教育方法学等の領域に分かれ、筆者は教育経営学領域で「教師教育論演習」などの教師教育のシステムやカリキュラム・マネジメントに関する授業を持っている。このいわゆる岩田ゼミの主な参加者は、こうした東アジア諸地域の教師たちと、日本人のストレートマスターたちである。ストレートマスターの多くは、教員養成系以外の一般大学の出身者で、さらに教育学を学ぶ志向を持って本学に入ってきている。それゆえ、教員養成課程や教職大学院とはだいぶ雰囲気の異なる場となっている。

「岩田ゼミ」の春学期は主に教師教育に関する文献購読、秋学期は主に教師教育実践に関するケース・スタディを扱っている。日本人の参加者が半分に満たない年もあり、「您好！」で授業を始めたりもしている。2011年度春学期には、Ruth Hayhoe（香港教育学院の院長を永く務めた）の『The Idea of a Normal University in the 21st Century』と船寄俊雄（教員養成史研究者）の

『『大学における教員養成』原則と教育学部の課題』（『教育学研究』76-2）二つをテキストとして、教師教育と大学との関係についてのマクロな検討を手がけた。1920年代に日中両国で高等師範学校の昇格論が似たような形で起こりながら、その後中国では北京師範大学を始めとする「師範大学」が高等教育の中で一定の地位を占めているのに対し、日本では「師範大学」の創設は行われず東京・広島に文理科大学が設けられたことが、その後の両国における大学と教師教育（特に日本の教員養成系大学・学部）の地位）に影響している、というような知見は、東アジア域内において教師となるべく学ぶ者の立脚点を見直すいい契機となっている。

このように、本学の既存の大学院における教師教育においては、必ずしも実践現場との往還を旨としたものではない。しかしながら、一定の現職経験を持つ者にとって、自分の立脚点を広い視野から振り返ることは、職能発達の上で大きな意味を持つ。この場の性格は、実は中国版教職大学院とも言える「現職教育碩士（≒修士）課程」に近い。この中国版教職大学院の入学資格は現職経験3年以上の者に限定されており、そのカリキュラムは理論学習や研究が中心である。のみならず修士に際しては研究論文（碩士論文）が課される。現職経験を持つ者に、その実践をベースに広く深い教育研究の機会を与えて教師の職能発達を促すことがこのキー・コンセプトなのである。

なお、本学大学院の授業とは別に自主ゼミ的に「東アジア教員養成ゼミ」が今年度より発足し、日本・中国・韓国などの大学院生が参加している。これは本学が2008年以降、「東アジア教員養成国際コンソーシアム」の幹事校を務め、学生交流を手がけていることの一環として始められ、同コンソーシアム担当の下田誠准教授がコーディネータを務めている。現在のところは月一度程度、学生の母国の教員養成システムやカリキュラムについての発表を行い、相互理解を深めている段階であるが、次世代に向けて若手中心の教師教育実践研究のコミュニティが成熟していく上で大きな希望を感じさせる。

関心を持つ方は併せて、東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター編『東アジアの教師はどう育つか』（東京学芸大学出版会、2008年、¥2,000+税）も参照されたい。



書評

「学習する組織」ピーター・M・センゲ

学習する組織とは、いかなるもので、いかにして生まれるのか、を5つのディシプリン（理論と手法の体系）で解き明かす。自己マスタリー、メンタルモデル、共有ビジョン、チーム学習、そしてシステム思考。時間と空間への視界を広げて因果の循環をとらえるシステム思考を基盤として、5つのディシプリンが相互にからみあい、組織が学習していく様子が事例とともに描かれる。

経営書に分類されるが、企業だけでなく、家庭も教室も会議室も地域も組織であり、紹介される例も多様である。簡潔に言って、うまくいかない組織をうまくいかにさせる道を述べた本である。しかし、そこに述べられる道は、深く静かな内省へとつながる。簡潔には表せない。ハウツー的な理解への道は閉ざされる。

読みながら、意識は過去へ未来へ現在へと絶え間なく動き回り、今の自分と目の前の現実との境目が崩れ、私とあなたと彼と彼女の境目があいまいにぼやけていき、無関係だと思っていた出来事と自分の間に因果の糸が結びつけられ、逃げ切ったはずのやっかいごとは、違う顔をしてまた現れる。現実の成り立ちはずらぎを増す。しかしそれは不安ではなく、「私たちは、新たな現実を生み出せる」という勇気の源泉であることに、やや遅れて気づく。

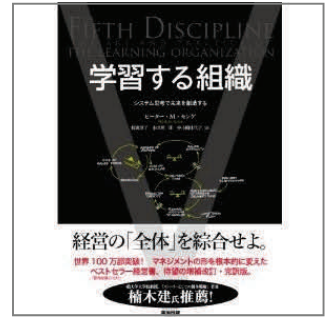
私は何を見ていないのかを考えさせられる。自分の考え方や態度から目をそらしているかもしれない。目をそらしている自分から目をそらして考えた気になっていたかもしれない。目の前の現実が私の目線によって出現していることを認め難い。現在の出来事が、私の3日前の行為に源を発していることを理解できない。時間と距離が近接するものを関係づけたがる。望んで取り組んでいたはずの行為の目的を見失う。本当に望む結果は意識の片隅に放置される。こうして、自分の盲目と偏りへの対面を強いられる。苦痛でありながら、視界が開けていく爽快感をとまなう。

個別の生命に見えて、実はひとつの生命であることを感じ取る目線が与えられる。私とあなたと彼と彼女は、同じ組織に属する個別の生命体。同時に組織という大きな生命体に私たちは含まれる。組織を機械のように扱ってはならない。部品のようにバラバラにして相互関係を切断してはならない。あなたが悪くて私が悪くない、ということはない。問題は私たちのつながりから生まれる。胃が悪ければ胃を切れば良いわけではない。胃も腸も私であり、私の思考と行為が胃を悪くする。胃を切れば、他の何かが悪くなるかもしれない。胃も腸も肝臓も私という全体につらなることを感じ取るとき、治癒への道が開かれる。そんな喩えが思い浮かんだ。

私とあなたが個別に学習して賢明になることと、組織が賢明になることは、必ずしもつながらない。私たちの交わりの中でだけ為し遂げられる学習がある。そこでは、組織と私とあなたが賢明になる。組織の学習の成果は、私たちの関係の網の目の中に蓄積される。私だけがそれを外に持ち出すことはできない。

読後、思考は整理されるどころか、拡散した。希望への拡散。感じ得なかつたものを感じられるようになる光明への拡散。著者センゲは言う。「真の学習は『人間であるとはどういうことか』という意味の核心に踏み込むものだ」と。わかった気になりたがる自分を厳に戒めなければならない。道のりは長い。学びは常に途上にある。

(富永良史 福井大学教職大学院)



報道ファイル

幼児教育セミナー 福井新聞社提供 2011. 9. 21

日本教師教育学会福井大会 福井新聞社提供 2011. 9. 22



福井市至民中学校第4回公開研究会
学びと生活の融合 一生涯学習へのスタートを切る

10/28 (金) 9:25-16:50

〒918-8032 福井市南江守町65-20
TEL 0776-35-3840 FAX0776-35-8012
<http://www.fukui-city.ed.jp/shimin-j/>

福井大学教育地域科学部附属幼稚園第25回幼児教育研究集会
伝え合う ひびき合う 協同して遊ぶ姿を求めて

11/5 (土) 9:20-16:15

〒910-0065 福井市二の宮4-45-1
TEL 0776-22-6687
<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzokuyo/index.html>

坂井市立丸岡南中学校自主研究発表会

学び合う環境の創造 (3年次)
〒910-0355 坂井市丸岡町高瀬15-2
TEL 0776-67-7722 FAX0776-67-7122
<http://www.maruokaminami-j.ed.jp/>

(木) 12:55-16:30

11/17

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校
第13回教育研究集会

兼 第33回福井県養護学校教育研究大会分科会
自分らしく生きる学びの創造 (4年最終次)
〒910-0065 福井市八ツ島町1-3
TEL 0776-22-6781 FAX 0776-22-6776
<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~yougo/>

(金) 9:30-16:45

11/25

福井大学教育地域科学部附属小学校
第37回教育研究集会

12/2 (金) 9:00-16:20

協働して学びを深める授業をつくる
〒910-0015 福井市二の宮4-45-1
TEL 0776-22-6891 FAX 0776-22-7580
<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-e/index.htm>

Schedule

10/22 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30) 10/29 sat 合同カンファレンス予備 (9:30-12:30)
11/26 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30) 12/3 sat 合同カンファレンス予備 (9:30-12:30)

[編集後記]

今号では、夏の間在大学・学校・学界で様々な繰り広げられた学びの様子を主に紹介しました。「暑い」夏を経て、これからどんな実りがうまれてくるのか、楽しみです。

(岸野麻衣)

教職大学院Newsletter No.35

2011.10.21発行

2011.10.21印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdfukui@yahoo.co.jp